

恭賀新年

we support ↓



MONTHLY

「東北に黒糖を送ろう!大作戦しんぶん」改め
復興支援「すけさきた」
かめらぼん しんぶん

「すけさきた」とは
宮城県登米市あたりの言葉で
「ボランティアに来たよ」という
意味である



震災から8度目の新年、宮城県名取市岡上地区の海岸で初日の出を見る人々たち(1日午前7時7分)

(河北新報ONLINE)

東日本大震災から8度目の新年を迎えた1日、被災地の岩手、宮城、福島は3県では人々が初日の出を拝んで復興への決意を新たにし、日々の幸福を願った。

津波で700人以上が犠牲になった宮城県名取市岡上地区では、雲間から金色に輝く太陽が顔をのぞかせると、海岸や堤防で待っていた人々が写真を撮ったり家族で寄り添ったりしていた。

岩手県の沿岸を走る三陸鉄道は「お座敷列車初日の出号」を運行。日の出に合わせて同県野田村の野田玉川駅に停車し、43人の乗客がホームから初日の出を拝んだ。

福島県いわき市の小名浜港では、復興支援イベントの参加者らが初日の出を迎えた。

震災思い「生」の字の石積み 崩れるたびに再現、今回で10代目

(神戸新聞NEXT)

阪神・淡路大震災からの再生を願い、石を「生」の字に積み上げたオブジェを再現する作業が8、9の両日、兵庫県宝塚市の武庫川中州であった。2日間で市民ら延べ約100人が参加。2019年1月16日夕方にライトアップされ、午後5時46分に黙とうを捧げる。オブジェは縦約20メートル、横約10メートルで、2005年に同市の現代美術家、大野良平さん(59)が創作。大雨などで何度も崩れたものの、市民らの手で修復、再現されてきた。東日本大震災があった2011年からは、被災した東北地方に「再生のメッセージ」を送る意味も加わっている。

前回のオブジェは今年8月に台風20号の増水で消失しており、今回は10代目の再現。親子連れなどが石を拾って丹念に積み上げた後、墨で「命」など思いの文字や絵を石に記した。会社員の男性(49)「同市は、かつて大阪市内で阪神・淡路大震災を経験。「普通に生きられることがどれだけ難しく、幸せなことか感じてほしい」と一緒に参加した長男(8)を見やった。大野さんも「流された石積み直すことで、子どもたちに自然の怖さと命の大切さを感じてもらえれば」と話した。(伊丹昭史)



▲8代目の石積みオブジェ「生」。西日本豪雨の増水で流出した=武庫川中州(宝塚市提供・神戸新聞NEXT)これを2018年7月28、29日に修復したが(9代目)、8月の台風20号でふたたび流されたため、今回10代目の再現作業が行われた。



▲参加費は一人200円(親子参加は300円)事前申し込みのうえ軍手、飲み物、帽子、タオル、長靴か運動靴を持参する。

資料:河北新報ONLINE、神戸新聞NEXT